

ひきこもり支援をミッションとする資金分配団体の事例

1. ひきこもりの問題

ひきこもりとは、「様々な要因の結果として社会的参加(義務教育を含む就学, 非常勤職を含む就労, 家庭外での交遊など)を回避し, 原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態(他者と交わらない形で外出をしてもよい)を指す現象概念」である。

この「ひきこもり」の問題について, 厚生労働省は「ひきこもり対策推進事業」を開始し, ひきこもり地域支援センターを設置することで関係機関が連携をして支援にあたる体制をとっている。また, 2019年からは「生活困窮者自立支援制度」との連携も強化し, さらにその支援体制を強化している。

一方で, 2019年3月, 内閣府からは, 15～39歳のひきこもり者は全国推計で54万1千人を上回り, さらに 40～64歳のひきこもり者は40～64歳は全国推計で61万3千人いるという調査結果が発表され, いまだにこの問題は解決に至っておらず, 大きな社会課題としてあり続けている状況が指摘されている。

さらに, この調査結果からは, ひきこもりの高齢化・長期化という問題も指摘され, 若年者向けのみではない, 中高年齢者向けの取り組みも必要であることが指摘されている。また, ひきこもりの問題は, ひきこもり当事者のみならず, 家族も大きな悩みや困難を抱えている場合も少なくない。こういった家族に対しても適切な支援の提供が求められる。

<事例>

2. 資金分配団体の概要

そこで, NPO 法人 X は, 「ひきこもり」という大きな社会問題の軽減・解決を目指し, 「民間公益活動を促進するための休眠預金等に係る資金の活用に関する法律」に基づく『資金分配団体』としての役割を担うことになり, そのため資金分配団体として, ①課題分析, ②ToC(課題解決型 ToC, 及び, 組織基盤強化型 ToC)の作成, ③評価計画の作成を行うことになった。

NPO 法人 X の概要は以下のとおりである。

1) 法人の設立年

- ・〇年

2) 法人スタッフの数

- ・〇名
- ・事業を運営するための最低限の人数しか配置されていない(それほど余裕はない)
- ・しかし, ベテランのスタッフも数名おり, プロジェクトを立ち上げたり, マネジメントしていくことに長けているスタッフもいる。

3) 法人の活動内容

(1) 中間支援組織としての機能

- ・NPO 法人 X は寄付金を集め, 様々な機関への助成を行っている(助成金としておおよそ5千万円程度の資金を有しており, そのうち750万円を法人の管理費とし, 残りを複数の団体への助成金として使用している)。

・そのため、この法人には、プロジェクトを立ち上げたり、マネジメント・評価をしていくためのノウハウが蓄積されている)。

(2)事業実施者としての機能

- ・NPO 法人 X は自主事業として、特に、ひきこもり者(特に、若者)の支援に力を入れている。
e.g.) ひきこもり者の相談対応、ひきこもり者の訪問、ひきこもり者の学習支援、など
- ・NPO 法人 X は、定期的に組織内部の研修会を行うなど、継続的に学習する組織風土がつけられている。

4)法人の財政基盤

- ・NPO 法人 X はそれほど潤沢な資金を有しているわけではない。
- ・ただ、そのため、法人内に寄付金や補助金、助成金を取得するノウハウなどは蓄積されている(少なくとも過去にそのような経験がある)。

5)他機関との関係

- ・NPO 法人 X は、ひきこもり者の支援を行ってきた実績があるため、同じような活動を行う様々な機関との良好な関係性を築けている。
- ・NPO 法人 X は、大学関係者とも良好な関係を築いており、一度、別の仕事である大学に所属する研究者と一緒にロジックモデルの作成や評価活動を行った経験がある。
- ・ある大学は、「ひきこもり者支援」を前面に打ち出した活動をしており、学生ボランティアを募ってひきこもり者の学習支援を行うなどの活動をしている。

6)その他の状況

- ・ひきこもり者の支援について、ここ最近ではテレビや新聞などでの報道も多くなってきた。
- ・NPO 法人 X の活動もあってか、NPO 法人 X が所在する自治体は、特にひきこもり者の支援に関心をもっており、いつか自治体としてもひきこもり者の支援に何か貢献したいという想いをもっている。

3. 対象地域で活動をしている主な団体の概要

1)NPO 法人 A

- ・NPO 法人 A は、これまでに「ひきこもり支援の啓発活動」に力を入れて活動をしている。
- ・また、ひきこもり者を対象にした相談支援も行っている。
- ・これまでに NPO 法人 A の支援によって、社会復帰を果たした元ひきこもり者も大勢おり、この元ひきこもり者の一部は、「同じような境遇の人の助けになりたい」という思いから「ひきこもり者支援」を行っている。
- ・また、他の元ひきこもり者もこのような活動を知っており、多くの元ひきこもり者から「ピアサポートグループをつくりたい」という相談を受けたりもしている。

2)NPO 法人 B

- ・NPO 法人 B は、これまでに「若者のひきこもり者(学生)」を対象に、学習支援などの活動を行っている。
- ・また、「学校に戻りたい」という希望を口にする人に対しては、復学の支援も行っている。
- ・ただし、これまでの活動は主に、「学校以外で勉強できる場を提供する」というアプローチを行っており、「家から出られないひきこもり者」へ支援を届けられないでいることに限界を感じている。
- ・さらに、ここ最近では、「学校に戻る以外の生き方」も積極的に応援したい、という想いもある。

3)NPO 法人 C

- ・NPO 法人 C は、これまで「ひきこもりの人たちの外出支援」や「就労支援」に力を入れて活動をしてきた。
- ・NPO 法人 C は、ひきこもり者の就労支援を行うなかで HW(ハローワーク)や中小企業の採用担当者との良好な関係を築いてきた。
- ・そして、HW のスタッフや中小企業の採用担当者のなかにはひきこもりの問題に対して、高い関心を示している者がいることも把握している。

4)ひきこもり家族の SHG(セルフ・ヘルプ・グループ)

- ・全国には、ひきこもり者の家族が集い、それぞれの家庭で困難のぶつかっていることを共有したり、適切な対応方法を学んだりするための会(家族会・SHG)がある。
- ・ひきこもりではないが、依存症や精神疾患については、家族が適切な関わり方を学び、実践することが、本人の回復を協力的に後押しすることになるというエビデンスが周知されている。